

24. 1. 21 「私たちの真ん中におられる神」

ヨエル書 2 章 27 節。

「あなたがたは、イスラエルの真ん中にわたしがいることを知り、わたしがあなたがたの神、主であり、ほかにはいないことを知る。わたしの民は永遠に恥を見ることはない。」

新しい年の歩みが始まっています。今年も主に期待をして歩んでいきたいと思います。昨年は 6 月に水害が起こり、特に福祉館しおんは大きな被害を受けました。それから、9 月からの復旧工事が始まり、12 月 25 日によりやく元の福祉館しおんでの喜楽希楽サービスの営業が再開されました。

半年間、職員の方々が大変な中、対応してくださり、そして多くの教会の皆様の中、大きな試練を乗り越えることができました。その背後には神様の不思議な守りと導きがあり、復旧工事が守られただけでなく、その間の、からしだねの働きの場所が備えられたり、デイルームの荷物の仮置き場が備えられたり、そして仮設が建てられて、喜楽希楽サービスも営業を続けることができました。

ちょうど 20 周年を迎えた喜楽希楽サービスでしたが、水害の経験を通して、喜楽希楽サービスが職員の献身と教会の皆様によって支えられているということをお教えいただき、何よりも主が共にいてくださり、喜楽希楽サービスの働きの中心に主がおられることを目に見えるかたちで教えてくださったのです。

皆様の昨年の 1 年間の歩みはいかがだったのでしょうか。主なる神様は、あらゆる方法で私たちを導き、恵みを与えてくださったのではないのでしょうか。嬉しい出来事を通して、驚くような出来事を通して、そしてときには、悲しみや痛みを通して、主が共にいることを示してくださり、愛とあわれみに満ちあふれた主のみわざを見せてくださったのではないのでしょうか。

私たちは主の恵みを覚えて今年も、主を礼拝し続けたいと願うのです。私たちが心から主を礼拝するときに、さらに豊かな恵みを受け、その恵みを受けて、ますます豊かな礼拝をささげて、そしてさらに神様も私たちの礼拝をもっともっと喜んでくださるといふ、礼拝を重ねるごとに、私たちと神様の関係がより深いものとなり、より喜びと楽しみにあふれた私たちの歩みとなるよることを期待いたします。

私たちが心を尽くして主に仕えることを、主ご自身が何よりも求めていることであり、そして、主に仕えることが私たちの幸せでもあると教えられています。イスラエルの民を導くモーセが語られた言葉です。

申命記 10 章 12-14 節。

「イスラエルよ。今、あなたの神、主が、あなたに求めておられることは何か。それは、ただあなたの神、主を恐れ、主のすべての道に歩み、主を愛し、心を尽くし、いのちを尽くしてあなたの神、主に仕え、あなたの幸せのために私が今日あなたに命じる、主の命令と掟を守ることである。見よ。天と、もろもろの天の天、地とそこにあるすべてのものは、あなたの神、主のものである。」

モーセは繰り返し語られました。なぜならば、イスラエルの民は主なる神様から離れ、自分勝手な道に歩いてしまう民であったからです。イスラエルの民は主のみわざによってエジプトから救い出された民です。10 の災いを経験し、海を渡って導かれてきました。それでも主を忘れてしまうのです。まるで私たちのようです。私たちも同じようにして、主の力強い御手によってここまで導かれてきたにもかかわらず、気が付けば、主に信頼し、主に仕えることを忘れ、自分勝手な道を進んでしまう私たちです。

ですから、主は繰り返し、語られるのです。約束の地へと導かれたイスラエルの民は、主に信頼し、主に従って生きるのではなく、他の国々と同じように、人間の王を求め始めました。私たちは今、何を求めているのでしょうか。イスラエルの民がこの世の王を求めるとき、預言者であり士師であるサムエルが語った言葉です。

I サムエル記 12 章 24 節。

「ただ主を恐れ、心を尽くして、誠実に主に仕えなさい。主がどれほど大いなることをあなたがたになさったかを、よく見なさい。」

サムエルは主を求めましたが、人々は王を求めました。サムエルは繰り返し語ります。「ただ主を恐れ、心を尽くして、誠実に主に仕えなさい。」イスラエルの民が何度も何度も言われていることです。私たちもこの言葉を聞きたいと思います。「ただ主を恐れ、心を尽くして、誠実に主に仕えなさい。」イスラエルの民は聞くことができませんでした。「主がどれほど大いなることをあなたがたになさったかを、よく見なさい。」と言われているにもかかわらず、これまでの主のみ業を覚えることなく、人間の力に頼ろうとしたのです。

結局、イスラエルにも王が立てられましたが、周りの国々との争いも絶えることなく、民は墮落し、偶像礼拝もはびこり、王国が分裂することにもなり、北イスラエルがアッシリアに滅ぼされ、南ユダもバビロン捕囚を経験することになります。しかし、それでも主は共にいてくださり、何度も何度も預言者を通して、主に立ち返り、主に仕えるようにと語られ続けていたのです。ここに神の愛とあわれみがあります。

1. いなごの災難

ヨエル書1章1節。

「ペトエルの子ヨエルにあった主のことば。」

預言者ヨエルを通して主のことばが語られます。イスラエルの民は、主から離れ、それゆえに災難の中にありました。そのような中、主なる神様は災難を通してただ民を懲らしめるだけでなく、民が主に立ち返ることを願い、主のことばを語られました。主は人々に対して祝福を備えておられたのです。

ヨエルが主のことばを語った時代については詳しく書かれていません。ユダの王が誰であったとか、背景が記録されていないのです。ですから時代を超えて、メッセージが語られているのではないかとも言われます。私たちもヨエルの預言に耳を傾けたいと思います。

預言者ヨエルは、イスラエルの地を襲う、恐るべきいなごの災いの最中に、主の言葉を語りました。今こそ、「心を尽くし、いのちを尽くして、主に仕え、主を愛するように」、イスラエルの民に、悔い改めを迫り、主に立ち返るように語りかけたのです。

ヨエル書1章4節。

「噛みいなごが残した物は、いなごが食い、いなごが残した物は、バッタが食い、バッタが残した物は、その若虫が食った。」

人々はどうしてこんなことが起こるのだろうか、驚いていたことでしょう。そしてその被害の中で苦しんでいました。ときに主なる神様は、「どうして？」と思うような、思いもよらない出来事を通して、私たちに大事なことを教えようとするお方なのです。

私たちは、日常の生活の中で、災難に出くわすことがあります。事故であったり、病気であったり、小さなことから大きなことまで、様々なことが私たちの身の回りで起こります。簡単に自分の非を認められるようなことであれば良いですが、「どうして？」と、「なぜ私がこんな目に合わなければならないのだろうか？」という、出来事に遭遇することがあります。

私たちは、身の回りに起こる出来事の原因や真意をすべて理解できるわけではありません。しかし、神様はご存じであるということは確かなことです。ですから私たちは、苦しい時、つらい時に、とにかく主に祈ること、主に助けを求めることができます。そして神様も、そのように私たちが主に助けを求めること、私たちが主に信頼して祈ることを望まれているのかもしれない。そして神様は助けてくださいます。

私たちが困難に直面したときに、できることは、ただ主に祈り、主を礼拝することです。むしろ、そのようなときだからこそ、私たちは祈らなければならないし、そのようなときにこそ、主に近づき、主の御前で礼拝をささげなければならないのです。私たちの祈りを通して、礼拝を通して、主は恵みと祝福を与えてくださるお方だからです。

ヨエルが主の言葉を語られたとき、まさに大きな災難がユダの民を襲っていました。いなごの大群がイスラエル中の作物を食い荒らしていたのです。「なぜこんなにいなごの大群がやってくるのか？」と、今まで見たことのない、これは現実の出来事なのかと疑いたくなるような、信じられないような出来事の中に人々がおかれていました。

私たちが生きる世の中には、そのような信じられないような出来事が起こるようです。人々はいなごの大群に圧倒されます。ヨエル書1章を読みますと、小麦も大麦も収穫できなくなり、ぶどうの木も、いちじくの木も、ざくろも、なつめ椰子も、りんごも、すべての木々が枯れたということが書かれています。

いなごの大群による大災害です。イスラエルの民が出エジプトをしたときの10の災いの中の8番目の災いを思い起こさせます。

出エジプト記10章14-15節。

「いなごの大群はエジプト全土を襲い、エジプト全域にとどまった。これは、かつてなく、この後もないほどおびただしいいなごの大群だった。それらが全地の表面をおおったので、地は暗くなり、いなごは地の草と、雹の害を免れた木の実をすべて食い尽くした。エジプト全土で、木や野の草に少しの緑も残らなかった。」

おびただしいいなごの大群がエジプトの全土をおおい、作物や木々を食い尽くしました。主はそのような出来事を通して、イスラエルの子らを、そのただ中から導き出すときに、「エジプトは私が主であることを知る」と語っています。今度は、いなごの災いがイスラエルの民にもたらされました。それは、このことを通して、イスラエルの民に対しても「私が主であることを知る」ということを教えようとしているのでしょうか。

とにかく、主のことばを聞くように。預言者ヨエルを通して主のことばが語られます。主が何を教えようとしているのか。主はどのように私たちを助け導いてくださるのか。主に聞き従う私たちに、主は何を与えてくださるのか。

期待していなかった出来事の中で、私たちが進むべき道を指し示すのは、主のことばです。そのようなときにこそ、私たちは祈り、主に助けを求め、主のことばを聞きたいと思うのです。

いなごの大群に襲われた民は、生きるために必要な作物を失い、絶望してしまうような状況に陥ってしまったことでしょう。それだけでなく、主を礼拝して生きる民として、致命的な、主にささげる物が無くなるということにもなってしまったのです。

主なる神様は、いかにして人間が生きるか、そして根本的な、最も大事なことを人々に教えようとされたのです。私たちにとって何が必要なのでしょうか。いなごの大群によって全てを失った民が、すべきことは何か、誰に何を求めるべきか。

主なる神様は教えようとされたのです。

2. 礼拝の喜びも楽しみも無くなる

ヨエル 1 章 9 節。

「穀物と注ぎのささげ物は主の宮から断たれ、主に仕える祭司たちは喪に服す。」

主にささげるための小麦粉やオリーブの油やぶどう酒がなくなってしまう。祭司たちは、何をどのようにささげるか、主に教えられた通り、その仕事を全うしていました。それが祭司として主に仕えるということでした。しかしそれができなくなってしまうのです。

いなごの災いを起こされたのが主ご自身であるならば、主ご自身が祭司の働きを止めさせたということになります。主なる神様はあえて、主の宮における交わりを途絶えさせたのです。そしてそのことを、しっかりと受けとめて、嘆き悲しむように言われるのです。

ヨエル 1 章 13-14 節。

「粗布をまとって悼み悲しめ、祭司たちよ。泣き叫べ、祭壇に仕える者たちよ。私の神に仕える者たちよ、行って粗布をまとって夜を過ごせ。穀物と注ぎのささげ物があなたがたの神の宮から退けられたからだ。断食を布告し、きよめの集会を召集せよ。長老たちとこの国に住むすべての者を、あなたがたの神、主の宮に集め、主に向かって叫び求めよ。」

主なる神様は、ただ祭司の仕事が無くなったという表面的なことに祭司が悲しむだけでなく、ささげ物を通して、主なる神様との交わりを持つことを、心を尽くして求めているかどうかを試されているようでもあります。

人々が、ただ苦しむだけでなく、そのことを通して、心を尽くして主を求めるのかどうか。祭司がかたちだけの、ただの儀式のような、うわべだけの神様との交わりだけでなく、祭司がイスラエルの民の代表として、主なる神様との交わりを心から求めているかどうかを見ておられるのです。そして祭司だけでなく、すべての者が、主に向かって心から叫び求めるように言われるのです。私たちが主に助けを求めるとき、私たちの心を主がご覧になります。

ソロモンが主を礼拝するための神殿を建てたとき、このような祈りをしていました。

I 列王記 8 章 37-40 節。

「この地に飢饉が起り、疫病や立ち枯れや黒穂病、いなごやその若虫が発生したときでも、敵がこの地の町々を攻め囲んだときでも、どのようなわざわい、どのような病気であっても、だれでもあなたの民イスラエルが、それぞれ自分の心の痛みを知って、この宮に向かって両手を伸べ広げて祈るなら、どのような祈り、どのような願いであっても、あなたご自身が、御座が据えられた場所である天で聞いて、赦し、また、かなえてください。一人ひとりに、そのすべての生き方にしたがって報いてください。あなたはその心をご存じです。あなただけが、すべての人の子の心をご存じだからです。そうして、あなたが私たちの先祖にお与えになった大地の上で彼らが生き続ける間、いつもあなたを恐れるようにしてください。」

主なる神様は私たちの心からの祈りを聞いてくださるお方です。大切なことは私たちの心であり、祈りです。主のことばを聞き、恐れることです。

サウル王の時代にはサムエルと通して「主は、全焼のささげ物やいけにえを、主の御声に聞き従うことほどに喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」(Iサムエル 15 章 22 節)とされていました。同じようなことが他の預言者を通して語られ、またイエス様も同じように語っています。

私たちは心から主なる神様との交わりを求めているでしょうか。
預言者ヨエルは語ります。

ヨエル書 1 章 16 節。

「私たちの目の前で、食物が断たれ、私たちの神の宮から喜びも楽しみも消え失せたではないか。」

イスラエルの民の災難はただ食物が絶たただけではありません。もちろんそれはいのちに関わることであり、大変な苦しみを経験しなければならないことだったでしょう。しかし、それ以上に、民にとっての災難は、神の宮から喜びも楽しみも消え失せたことなのです。食べ物の不足で苦しむだけでなく、神殿のささげものがただ無くなるだけでなく、ささげる喜びや楽しみ、主なる神様との交わりを持つことの喜びや楽しみが無くなることを、何よりも悲しむようにとヨエルは勧めるのです。

ですから、私たちは主を呼び求めるのです。私たちはこの世の不足のために助けを求め、嘆くのではなく、主と共に生きることの喜びや楽しみを心から祈り求めるのです。

ヨエルは野の獣でさえも、主をあえぎ求めていると言います。私たちは主なる神様をあえぎ求めることができるでしょうか。

3. 主に立ち返れ、私が変われば、主が思い直される

ヨエル書 2 章 12-14 節。

「しかし、今でも——主のことば——心のすべてをもって、断食と涙と嘆きをもって、わたしのもとに帰れ。」

衣ではなく、あなたがたの心を引き裂け。あなたがたの神、主に立ち返れ。主は情け深く、あわれみ深い。怒るのに遅く、恵み豊かで、わざわいを思い直してくださる。もしかすると、主が思い直してあわれみ、祝福を後に残しておいてくださるかもしれない。あなたがたの神、主への穀物と注ぎのささげ物を。」

主は言われます。「心のすべてをもって、断食と涙と嘆きをもって、わたしのもとに帰れ。」私たちの心を見るお方が、主なる神様から離れた心を、主のもとに帰らせるように言われます。主の宮でいけにえをささげることよりもまず、主に心をささげるように、主を求め、主が与えてくださる喜びや楽しみを求めるように、あなたの心を変えなさいと勧められるのです。

私自身、昨年の水害という災いを通して、主に立ち返るように、心を変えるように導かれました。それまで、福祉館しおんでのからだねや喜楽希楽サービスの働きに関わっていましたが、主に心を向けて働くことができず、日々当たり前のように、習慣のようにして、喜楽希楽サービスのデイサービスに行っていたということに気づかされたのです。

水害によって建物を失い、働く場所を失い、礼拝の場所を失ったことで教えられたことがあります。

福祉館しおんで働きながら、私は心から主なる神様を求めていただろうか、働くことを通して、ご利用者さんとの交わりを通して、主なる神様に礼拝をささげることができていただろうかと考えさせられたのです。

建物の復旧を祈りながら、それ以上に祈らなければならないことがあることに気付かされました。ただ建物が立て直されるだけでなく、その場所で主が礼拝されること、たくさん職員とご利用者の方々がいる中で、まず私がその場所で心からの礼拝をささげることができるようになること、福祉館での働きを通して、その働きが主にささげられること、主が与えてくださる喜びと楽しみを皆で分かち合うことができるようにと、私は祈る心を変えられました。

私は何のために働いているのか、何のために生きているのか、何を求め、何に頼り、何を見ているのか。主から離れていた心に気付かされました。ですから私にとって、昨年は、神様の恵みとあわれみを経験する、喜楽希楽サービス 20 周年の年となりました。

私たちの主なる神様は、あらゆることを通して、ときに災いを通して、私たちが主に立ち返るように、そして主の恵みに満たされて生きるようにと導かれます。

私たちが立ち返るとき、主は思い直してくださり、私たちが祈る時、主がその祈りを聞いてくださり、私たちが心からの礼拝をささげるとき、主は多くの恵みを私たちに注いでくださいます。

もし私たちの心が主なる神様から離れるならば、主に礼拝をささげることの大切さ、主の恵みによって生きることの必要性を教えてください。そして私たちがささげる物も神様から与えられためぐみであることを教えられます。

ですから私たちは、恐れることなく、ただ主を信じることができます。

4. 主が真ん中におられる

ヨエル書 2 章 21-24 節。

「地よ、恐れるな。楽しみ、喜べ。主が大いなることを行われたからだ。

野の獣たちよ、恐れるな。荒野の牧草が萌え出で、木が実を実らせ、いちじくとぶどうの木が豊かに実る。

シオンの子らよ。あなたがたの神、主にあつて、楽しみ喜べ。主は、義のわざとして、初めの雨を与え、かつてのように、あなたがたに大雨を降らせ、初めの雨と後の雨を降らせてくださる。

打ち場は穀物で満ち、石がめは新しいぶどう酒と油であふれる。」

いなごの災難をもたらされた主なる神様が、「恐れるな、楽しみ、喜べ」と言われます。恵みの雨を降らせてくださり、作物や木々を豊かに回復してくださるのです。雨は神様が与えてくださる祝福の象徴でもあります。主なる神様は祝福と恵みを与えてくださるお方です。

私たちは神様が与えてくださる祝福と恵みによって、満たされ、喜びと楽しみを味わうことができます。祭司たちが、恵みの雨によって豊かに実った、小麦や、ぶどう酒やオリーブ油を主の宮でささげたように、私たちは、たくさんの主の恵みを受けて、その恵みを持って、主にささげ、主との交わりを持ち、喜びと楽しみを経験することができます。

神様が降らせてくださる祝福の雨は、私たちがただ豊かな生活、快適な生活、自分の喜びのための雨ではなくて、主にささげるための恵みを受けることであり、主なる神様と共に恵みを分かち合うためのものなのです。

自分のために祝福の雨を求めるのではなく、神様のために祝福の雨を求めるのです。

私たちの日々の生活の中に主なる神様がおられるでしょうか。私たちの生活のどこに、神はおられるでしょうか。私たちのささげる礼拝の中に主がおられるでしょうか。

ヨエル書 2 章 27 節。

「あなたがたは、イスラエルの真ん中にわたしがいることを知り、わたしがあなたがたの神、主であり、ほかにはいないことを知る。わたしの民は永遠に恥を見ることはない。」

預言者ヨエルと通して、主が語られたことです。

「わたしがイスラエルの真ん中にいる」、「わたしがあなたがたの神、主である」、「わたしのほかに神はいない」。

私たちの真ん中にも主をお迎えしたいと思います。私たちの日々の生活の真ん中に、私たちの働きの真ん中に、私たちの家族の真ん中に、私たちの奉仕の真ん中に、私たちの礼拝の真ん中に、私たちに与えられた人生の真ん中に、主をお迎えいたしましょう。

新しい1年、たとえ災いや、苦しみ、悲しみを経験するようなことがあっても、むしろそのようなときにこそ、主を求め、主のあわれみと恵みを味わい、主が与えてくださる喜びと楽しみに満たされて、心から主に礼拝をささげ続けることができますように。